
とある暁の輪廻(リンカネイション)

平井純譚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある暁の輪廻（リンカネイション）

【Nコード】

N0551M

【作者名】

平井純譚

【あらすじ】

とある暁の傀儡師エクスマキナの続編

幾重の戦いを乗り越え家族を手に入れた、かつての暁のメンバー「サソリ」

父親となった彼の行く道は……

1、プロローグ（前書き）

まさかの続編！！（書いちゃいました！！！！）

楽しんでくれたら嬉しいです。

後書きにオマケあり（主にギャグ）

1、プロローグ

元殺人集団 暁のメンバーであり天才造形師と言われたほどの傀儡使い「サソリ」

その人物が忍者との戦闘により命を落とし

科学が発展した世界へ転生していき

数多くの経験を積んだ

大切な仲間、それを守るための戦いに身を投じ

傀儡（人形）からの脱却に成功した

そんな彼も結婚をし、一人娘という子宝にも恵まれ以前の生活からは、考えられない程の平和な日々を送ることができた

学園都市最大の災害「テイルピースト尾獣事件」を解決した立役者としての功績を称えられ研究者の道を歩むことになった

事件の時に圧倒的なチャクラを持つ尾獣に対抗するためにかつて所属していた「暁」のリーダー ペインの最強瞳術と謳われる「輪廻眼」を手に入れた

戦闘に勝利してもサソリの眼まなこから消えることなく宿っている

今回の話は、「とある暁の傀儡師」エクスマキナの続編さてんさや「佐天小夜」が中学生に成長した所から始まる

とある魔術の禁書目録インデックス

とある科学の超電磁砲^{レールガン}

×

NARUTO

とある暁の傀儡師^{エクススマキナ}の続編

「ん!!」肩まで伸ばした赤い髪の幼い女の子が家に置いてある大きめのダンスをちょっぴり開けて中のモノを取り出そうとしていた隙間が小さい為（力が弱い）中にあるモノが何のか分からないが頑張っ張って引っ張り出そうとしている

「う~~~~~!!!!」

徐々に外の空間へと姿を見せ始める
黒い服のようだ……

少女は、足をダンスに当て全身に力を入れて引っ張る

「う~~~~~ん!!!!」

あっ!!!!」

やっこの思いでダンスから黒い衣服を取り出した

「はあ、はあ………」

かなり疲れたようで息を上げている

それでも、その顔は達成感で一杯という面持ちである

少女は、

自分が頑張って取り出した黒い衣服を広げる

その服には、黒地に赤雲の模様が描かれた外套がいのとうのようであった

少女は、頭からそれを羽織下の部分を引きずりながら移動する

向かう場所は、勿論自分の功績を称えてくれる人

タンスの部屋から扉を少し開け、出来た隙間から這うようにして出ていく

家族が団欒だんらんする部屋にやってくると自分の大好きな人の後ろ姿が目
に飛び込んでくる

少女は、黒い衣服を羽織ったまま走りだし、その人が座っているソ
ファーに近寄る

「パパ、見て見て」

少女は、自分の父親に向けて、羽織っている黒い服を両手で目一杯
に広げる

その服を見た時父親は、一瞬驚いたような顔になったがすぐにイタ
ズラに笑みを浮かべると

「小夜……随分懐かしいモノを持ってきたな……
一人でやったのか？ えらいぞ……」

父親は、少女にも負けない程の赤い髪色をしており
ゆっくと少女の頭を撫でる

「えへへ、ママにも見せてくるね」

少女は、黒い衣服を翻し駆けて行った

少女が部屋から出て行くのを確認すると
遠い過去を思い出すように家の天井を見つめる

「暁時代の服か……あれから、どれくらいの時が流れただろうか……」

夜もロクに寝ていないと思われる程の深い隈のある目元
そして眼の部分には、独特の波紋状の眼 「輪廻眼」が宿っている

これが現代のサソリの姿である
暁時代に殺人者としての面影を残さず
この世界で科学者の道を歩んでいる

とある暁の輪廻
リンカイネイション

スタート

1、プロローグ（後書き）

オマケ

メンバー

サソリ…………企画担当 プロデューサー

佐天涙子…………出演

御坂美琴…………出演

始まりはじまり

草木も眠る丑三つ時

そんな真夜中に、何故か

軽トラックの荷台に乗っている、佐天、御坂

佐天「さあ、始めました！！オマケ企画ですよ御坂さん！！！」

御坂「うん…………色々聞きたい事があるけど…………なんでこんな時間？」

佐天「それは、時間との勝負だからですよ！！！今回の企画は、サソリが考えた物ですから」

御坂「ゴメン、全然わかんない…………何のこの企画？」

佐天「企画ですか！！？」

ズバリ、「粗大ゴミで家を作ろう」ですよ！！

いつの時代もマイホームは、夢ですから」

オマケ第一回目

マイホーム

「とある器物の新居建設」

早速、作業服に着替え軍手をはめる

御坂「えっ！！！じゃあ

ゴミ回収する前に私達が集めるって事？」

佐天「はい！！！！」

今回の企画、

学園都市で出された粗大ゴミを集めて、立派な家にしよう！！！！

まさかの次回へ

2、物語の始まり（前書き）

遅くなりました!!!

後書きのオマケも見てください!!

2、物語の始まり

「では、今回の研究成果を「佐天博士」に説明して貰います。
では博士、壇上へ」

何処かの大きなホールのような所で白衣を身に纏っている研究員達が学会を開いていた

司会者の合図と共に一人の白髪の白衣を着た老人が大きなスクリーンの用意された壇上に上がり、あらかじめ出されているマイクの前に立った

「今回の研究は「傀儡義足の新技術」です
では佐天博士、発表をどうぞ」

さっきまでホールを照らしていた明るい電灯の明度が薄くなり、パソコンソフトのパワーポイントが起動する。

始めるにタイトルがスクリーンに表示されていた

「傀儡義足の有用性」

白髪の老人がゆっくりと抑揚のない言葉で説明を始めた

時折、レーザーポイントで強調したい部分にラインを引くように照らしたり

身振りも交えたりして他の研究者にも分かりやすくしていく

この時代に生きる者なら知らない人がいない程の超有名な科学者であり最強の能力者として位置付けられている 「佐天サソリ」の発表であるが為今回の学会の注目度が高い

研究発表内容は、「事故や災害によって失ってしまった、身体機能を傀儡の技術により取り戻す」ということであった

無事、今年度の研究成果を発表し終えた、サソリは自分の控え室に向かう為に足を進める

（これで一段落だな…）

と今日までの日常の様子を思い出す

彼が今来ているのは、日本の国立大学の研究施設

ここで今までの研究内容を発表すると同時に新しい情報を汲み取りに来たのだ

サソリの研究分野は、多岐に渡っており

専門である造形分野だけでなく数学・物理学なども専門として活動している

ここ6年程が忙しさのピークであった

自身の傀儡の研究に加え、スウェーデンにある科学トップの施設

「王立科学アカデミー」の会合にも参加をするため海外を飛び回っていたのだ

当然、その間は家族と会えず、ひたすら研究に打ち込む毎日

そして、ようやく今日の研究発表で日本に帰ってることが出来た

ガチャッ！！

自分の控え室の扉を開けるとその部屋には、もう一人の研究員がサソリの方を見ている

腰まで伸びた長い黒髪に馴染みのある顔

元サソリの人傀儡である

「三代目 風影」の現在の姿である「フウエイ」が拍手をしながらサソリを迎える

「さすが……マスター

良い発表でした……」

「先に家に戻ってもよかったのだがな……」

「……私の研究でもありますから……」

彼女は、かつての量産異能者^{レディオノイズ}「妹達」^{シスターズ}計画の時に

サソリの人傀儡である三代目 風影と超電磁砲^{レールガン}の御坂美琴のクローンそして、サソリの頭脳によって誕生した

チャクラを磁力に変えることが出来る体質の風影の特性と御坂のレールガンを受け継いでいるため

電場と磁場の空間において最も効力を発揮する

現在は、サソリの妹として研究所の副所長を勤めるなどサソリの補佐的な仕事をしている

サソリは、右手を返す動作をするとカチャカチャと音がなり白髪の老人の形が徐々に崩れ始め、足元に力なく倒れた

すると白髪の老人の中から年若そうな赤髪の青年が現れる

「見た目が若いって考え物だな……」

サソリは、見た目の若さとは打って代わり老齡じみた（熟練した）考えを確固として持っているため

見た目とのギャップに他の人が驚いてしまうため
フウエイから「いっそのこと老人になったら？」
のアイデアに乗り

老人に見える第二のヒルコを制作したのだ

あくまでも公の場に出る時だけだけど……

「じゃ……帰るか……」

「はい」

時刻は、午後3時を回った辺りだ

学園都市 常磐台中学

「小夜ちゃんすごい!!」

「そうかしら!？」

二人の中学生が中学校の正門から出ていく

一人は、茶色の髪をし

もう一人は、長く赤い髪をした女の子達であった

「琴だって凄いわよ
だって超電磁砲レベルガンが使えるじゃん!!
十分凄いわよ」

「だって!!小夜ちゃん
デュアルスキル
「多重能力者」!!!!

実現不可能とされた幻の存在が目の前にいるのよ!!
尊敬せずにはいられないよ」
「そうかな？」

生まれつき私には、能力全般が全て使うことが出来た
始めて見る能力でも

まるで自分の能力のようにそつなく使いこなすことができ、学園都市では三人目となる「絶対能力者（レベル6）」として認定された
後の二人は、不明

私（佐天小夜）の隣にいるのは、みさかことは「御坂琴葉」!!
学園都市の「超能力者（レベル5）」であり「電撃使い（エレクトロマスター）」

毎回の会話に「凄い!!」を連発するのはどうかと……

そんな中学生とは、思えない能力者が歩いているとなれば自然と人々の視線が集まってくる

正直慣れたけど……

と都市の大通りを歩いていると

ドガァン！！！

大通りのすぐ横の銀行から大きな爆発と共に大量の噴煙が撒き散らされた

「！！！！」

銀行から出て来たのは、覆面をかぶり、手に大量の札束がぎっしり詰まった鞆を片手に三人の男

「ヨシ！！！！このまま引き上げるぜ！！」

「おう！！！！」

会話と風貌から銀行強盗と判断するのにそんなに時間がかからなかった

小夜と琴葉は、互いに顔を見て確認し合う

「あたしが相手するから

琴葉は、ケガ人がいないか確かめて」

「うん、わかった！！」

小夜と琴葉は、二手に分かれ迅速にその場の対処にかかる

小夜は、強盗三人組の前に立ち塞がり

「風紀委員です!!」
ジャツジメント

大人しくしなさい!!」

あまりに早い風紀委員の到着により一瞬焦った顔をするが
小夜の姿を見るなり、大声で笑い始めた

「ギャハハハッ

どんな奴が来たかと思えば!! こんなみょうちくりんの奴かよ!!」

「俺達の相手をしたいならもう少し、胸に栄養を付けてくるんだな
!!!!」

ピクッ

胸に栄養……↓胸が小さい……あたしの一番触れては、いけない
所に!!!!

いいわよ!! 地獄に落としてあげるわ

ほとばしる怒りを抑えながら小夜は、ゆっくりと瞼を閉じ再び開く
まぶた

彼女の両目には、独特の波紋模様の眼が姿を現す

最強の瞳術 「輪廻眼」が発動したのだ

「さて、どの能力がいいかしら……パイロキネシス発火能力?
エレクトロ電撃?

どれも、学園都市最強クラスだけだね♪」

少女の不気味な眼差しが三人組の強盗を鋭く捉える

「お、おい……あの眼って……」

と一人が言葉を走らせるが

サイコキネシス

「念能力!!」

三人組の一番リーダー的な存在を目算して小夜は、念をその人物に向け吹き飛ばす

リーダーのすぐ後ろは、銀行の建物があつたため
地面と垂直になるかのように建物にめり込む

「ぐああああ!!!!」

「アンタね、あたしのことを貧乳やら小学生並みの成長やらと言ったのは!!!!」

胸なんて、これからの頑張りしだいなんだから!! (↑?)」

「そ……こ……まで言ってね!!」

「うるさい黙れ!!!!」

さらに、サイコキネシスの力を強める小夜であつた

「あらら、小夜ちゃん……これじゃあ、アンチスキル警備員が来る前に終わっちゃうな」

ケガ人がいないか調べに行っている琴葉が現場を見て呟く（八つ当たり? 現場）

「!!!!」

直後に琴葉の首元にナイフが当てられ
いわゆる人質のような格好になった

顔を軽く後ろに向け
自分を人質にとる犯人を凝視する

「あらあら、小夜ちゃんに勝てないからって、今度は私ですか？
私もなめられたモノですね」

「さあ！！お嬢ちゃんの友達がどうなってもいいのか！！さっさと
そいつを解放しろ」
かまわず小夜に向けて話す強盗の一人

聞いてないな……………
仕方ない

バチバチッ

「んッ——！！」

ズガッシャアアアン
(電流通過中)

「ぎゃあああああ！！」

半ば黒焦げの状態になり、男はその場で白目を向き倒れてしまった
「人は、見た目で判断するモノではないですよ」

悪魔の笑顔で男を見る琴葉一人脱落と……………

「へえー！！アンタも能力者か……………だったらこの場合は、どうなる
かな」

三人組の強盗の一人が鋭い果物ナイフを片手に小さい子供の喉元に突き立てていた

「し、しまった!! 一瞬、目を離したばかりに……」

「ご自慢の能力が使いたいなら使うがいい……この子供がどうなってもいいのならな!!」

小夜もこの状況に固まってしまい
どうしたら良いのか判断がつかない

「やばっ!!!! この状況は、教えてもらってないわ……どうすればいいの……?」

刹那

「全く……能力者なら周りの状態を把握してから使うんだな……」

「え!!!!」

ドン!!

明らかに高い場所からこの地点に降りてきたのは

小夜と同じ赤い髪をし、黒い服を身に纏った青年であった

その目は、何日も寝てないかのように隈が深く刻まれていた

歳は、あたしと同じくらいかな……?

小夜がその青年を見ていると

「なっ！！！！なんだてめえは！！！」

「マスター！！ナイフ回収しました」

黒い髪をした女性が小さい子供に向けられている鋭利な刃物を正確に吸い寄せ

右手に収める

小さい子供は、恐怖により硬直していたが解放されたのがわかると大声で泣き出す

「クソがあ！！！！これでも食らえ！！！」

小夜がサイコキネシスで抑えていた強盗のリーダーがマシンガンを取出し

赤い髪を生やす青年に向け発砲する

青年は、躲す（かわす）動作を一切せずに男を見据える
そして……

「新羅天征……」

青年に向かっていたマシンガンの弾薬が弾かれコンクリートの道路に埋まる

「なっ！！！！」

信じられないモノを見るような目付きで青年を見るが
あっという間に姿を消して強盗の男の真後ろき高速移動し

「フン……！！！」

青年は、強盗の延髄を殴りつけ気絶させてしまった

小夜は、一瞬何が起きたのか分からなかったが
彼女の持っている「輪廻眼」によって辛うじて見えていると言った
所であろう

「あの人……あたしと同じ眼をしている……」

もう一つ、その眼が捉えたのは、自分と同じ波紋模様の眼であった

2、物語の始まり（後書き）

オマケ とある器物^{マイホーム}新居設立

粗大ゴミで家を作ろうという企画により深夜に集められた佐天・御坂
軽トラックに乗り込む（運転はサソリの傀儡で行います）

出発

午前2時3分
学園都市某所

粗大ゴミを発見し、降りる二人

御坂「いきなりね……見つけたくないけど」

佐天「電子レンジですよ!! 御坂さん」

御坂「これは、捨てるわね」

開く部分が錆びてて開かないよう!!!

佐天「でも、コンセントは生きてますよ!!」

御坂「そんな所生きてたって使えないでしょ!!!」

佐天「あと!! 気になるのがこの椅子ですね!! どうします?」

クッションの部分が裂けまくりのバーの回転椅子

御坂「これは……」

佐天「でも、今後出てくるか分かりませんよ!!」

とりあえずキープ

もっと良いのがあれば交換

軽トラックに積み込む

佐天「電子レンジは、欲しかったです」

御坂「車の中で言ってたわね」

収獲

電子レンジ

椅子

次の現場へと向かう

佐天「あれ!!! あそこに何かありますよ!!」

御坂「いっぱいあるわね…」

次の現場に止めて降りる

佐天・御坂「ベッド!!!」

佐天「これカーペットですよ」

段々楽しくなってくる

次々と軽トラックに積み込む

御坂「この木の板どうする？」

佐天「これは、ベッドの一部ですかね……？一応運びましょう」

板を積み込む

御坂「……………ん！？」

御坂が粗大ゴミを漁っている所に謎の物を見つける

ゴミ取りのコロコロの巨大化させた奴

何に使うのこれ？

御坂「じゃ、ここはこの辺で……次行きましょう」

収獲

ベッド ソファー

カーペット

続く

3、衝撃的な話（前書き）

心臓の発作に負けないぞ

ああ、健康になりたい

3、衝撃的な話

銀行強盗騒動から数分後

アンチスキル
警備員が現場に到着し男達を取り押さえる

「ご協力感謝します……もしかして……サソリさんですか？
あのテイルビースト事件を解決した」

若い感じの警備員がアンチスキルサソリの目の前に来てお礼と確認をとる

「ん……そうだが」

「そうですか！！！！やっぱり！！昔から大ファンです！！！！
サインくれますか！！！！
出来れば……直幸（名前らしい）へも入れてくれますか！！！！」

どこからともなく色紙とマジックインキを取出しサソリに渡す

仕事をしろ！！仕事を

と思っても断ると更にひどくなるので了承

サラサラ

「こんなもんでいいか？」

「わぁー！！！！ありがとうございます」
と色紙を天に掲げ喜んで現場に戻る「直幸」

案の定、上司にぶたれていました

「いつの時代でも……この輩は、減りませんね……マスター」

サイン騒動が終わるのを見計らったようにフウェイが話しかける

「こういう平和な時代だから増えるんだよ……オレも犯罪者だったからわかる」

それにしても、ペイン（暁のリーダー）の話だとメンバーは、ほとんど死んだらしいな

デイダラもか……アイツのことだから「爆死」だな

そんな何とも言えない虚無感がサソリの脳裏によぎる

「ちょっと……！！アンタ」

女性の声が聞こえてきたのでそちらの方を見ると

赤い髪をした女の子が指をビシッとサソリに突き立て近づいてくる

誰だ？

「何でアンタ！？デュアルアイ多重眼デュアルアイが使えるの？

あれは、かなり稀な眼なのに……！！」

デュアルアイ？……ひょっとして「輪廻眼」のことか……

「輪廻眼か？……」

「りんねがん……!?!」

何よそれ!?!?

第一!?! アンタに助けられなくってもあたしで解決出来たわよ!?!」

「……子供が人質にとられたのにか……」

サソリの的確な言葉にたじろぐ小夜

痛い所をつくわね……この男!?! 生意気

「あれは、予定外のことよ!?! 子供は、しっかりと親が見てないから親の責任!?! あたしには、責任はないわ!?!」

コイツ（小夜）……頭悪いな全然周りを見てない

能力だけ恵まれたバカか……

「おい……」「小夜ちゃん、さすが!?!」

サソリが小夜に話かけようとした時、斜め後ろから琴葉が走りよりサソリの言葉をかき消す

「……………」

「凄いよ!?! 最後の重力の能力カッコよかったよ!?!」
グラビトン

琴葉は、サソリの「新羅天征」を小夜がしたと思いこんでいるようだ

「いや、あれはそう……」

思わずバランスを崩しそうになるが何とか持ちこたえる小夜

それを見たサソリは、向きを変えて黙って歩き出した

「マスター……何か言いたげでしたけど……言わなくていいのですか？」

「なんか色々面倒になったからな………帰るわ………」

それにしても………今「小夜」って言ったな………オレの子供もそんな名前だったな

まさかな………

そんな訳ねーか

その後、琴葉とフウエイと分かれて家路へと向かう

小夜、サソリ

ちなみに、フウエイは久しぶりにマシン達に会いに行くそうだ

説明）マシン……サソリの操っていた傀儡「三代目 風影」をモデルに造られた機械生物

ただいま、研究所でお留守番

「何でアンタは、あたしの後を着いてくるの！……？」

「……家への道が同じだけだろ………」

初っぱなからあんな出会いをした二人が「仲良く、お手手をつないで帰る」わけもなく

道幅いっぱい離れて歩く
なんやかんやで、二人の我が家に到着!!

「さあ!!ここがあたしの家よ!!満足した!!!!
早くどっか行きなさいよ
ストーカー!!」

表札には「佐天」の二文字

やっぱりか……あからさまに嫌な顔をするサソリ

ということは、コイツ

オレの子供か……

親をストーカー呼ばわりするな

サソリが静かに思考する中小夜、相変わらず大声で
言葉を並べていく

ガチャッ!!

不意に玄関の扉が開き、中から黒い髪的女性が出てくる

「玄関先でうるさいわね

あら!!小夜、おかえり」

夕食の用意をしていたのかエプロン姿であった

「お母さん!!あたしの後ろから堂々としたストーカーが!!」

「ストーカー？」

黒髪の女性は、視線を小夜からサソリに移行すると

「サソリ！！！！おかえりー♪」

「久しぶりだな……佐天」

「佐天って！！あなたも佐天でしょうが」

正論である、でも呼び慣れてるから

佐天の顔から自然と笑みがこぼれサソリも小さな微笑を見せる

終始和やかな雰囲気

しかし、その波に乗れてない人が約一人

「えっ！！えっ??？」

小夜が二人の間を視線が右往左往する

「あ！！小夜は、小学生に上がる前に会った時以来だから覚えてないかな？」

佐天が小夜の顔を覗きこむ

「えっ！！ま、まさか……」

佐天は、いたずらに笑みを浮かべ

「紹介します！！小夜ちゃんのお父さんのサソリです」

3、衝撃的な話（後書き）

オマケ、とある器物の新居設立マイホーム

粗大ゴミで家を作ろう

続いての現場へ

御坂・佐天「これは……」

掃除機

佐天「やっぱ家には、必要ですね
アレ？先っぽがありませんね（ホースのこと）」

御坂「どっかで見つかるわよ」

とりあえず軽トラックに運ぶ

佐天「そのクッションの上に乗せたらどうです？」

御坂「こうかしら……」

続々と粗大ゴミを乗せる二人
しかし、佐天が爆弾発言を

佐天「ねえ、御坂さん

この企画、サソリが考えたんですよ
てっきり手伝ってくれるかと思ってましたけど

働いているのあたし達だけですね」

御坂「フツーに見てるだけね……」

サソリ「いや、見張りをしているから
こっちを見るな……」

作業スタート

佐天「やっぱり積み方が問題ですかね」

だんだん軽トラックの荷台がいっぱいになる

御坂「こんなに見つかるなんて思わなかったわ」

佐天「今の時刻は……2時半まだ30分しか経ってない!!」
あと、4時間半やります

収獲

椅子 テーブル

ソファー 電気スタンド掃除機^{ホースなし}

次の現場へGO!!

発見

佐天「凄い……テレビですよ♪」

しかもかなり珍しいテレビデオ（ベータ）

使えない……けどいただく

御坂「これ積む所ないわよ」

収穫

テレビデオ（βベータ）

佐天「この椅子いる？」

会社で使うような椅子をガチャガチャと叩きながら言う

御坂「いらないわ……椅子は、余ってるわから」

佐天「いや、あたし達も選べる立場になったんですね」

御坂「その前にあのバーの椅子（一番最初に拾った）を捨てるべきよ」

しかし、荷台の一番下にあるため取出し不可

整理整頓

続く

4、激物な朝（前書き）

昔やった遊び

「アリの巣の近くに気絶させたハエを置く」

ハエは、軽く押さえつけると簡単に気絶します（ハエ叩き推奨）
それを……自然界の恐ろしさがわかりますよ

また、やりたいな

4、激物な朝

昨日は、衝撃的な1日だった

科学に特化して発展を遂げた「学園都市」

超能力開発がカリキュラムに組み込まれており
日々「頭の開発」に取り組んでいる

しかし、「超能力」、「頭の開発」等というモノは、個人差が大きく
生まれつき「エリート」の者、能力はあるが弱い者
全く能力を有していない者（無能力者）という区別が出来てしまった

生まれつき高位の能力者であれば良いのだが：

能力レベルが低いため努力をしなければならない者
ましてや、無能力者は言うような虚無感などに苛まれる

高位の能力者に嫉妬し、努力をせずに自分の下に引きずり堕ろそう
とする動きが出てくるのも当然と言えば当然であった

昨日のような銀行強盗の事件もそのカリキュラムのいわば被害者である
もある

しかし、だからといって：カリキュラムの被害者「スキルアウト」
等の活動を容認するわけにはいかない

これが、あたしの所属している「風紀委員」ジャッジメントの基本理念として確立

されていることだ

だから、ジャッジメント風紀委員の新たな考えとして「能力を持っていない者（レベル0）であっても特定の試験と適正検査の結果によっては、所属できる」

としている

しかし、それでも努力をしなければいけない世界

一度、スキルアウトに堕ちた者には、酷な話

一種の逆説パラドックスを含んだ基本理念であるが的を得ている点がある

学園都市のカリキュラムを非難するなら「自分が変われ」、「適応していけ」と遠回しな呼び掛けをしているのだ

「世界を動かすのなら自分が動け」

あたしの座右の銘……

世界（スケールの大きいモノ）を変えていきたいのなら、変わるのを待つのではなく

自分自身が変わらなければいけないと言う意味であるが

自分の予期しないことで世界が変わりだすこともある

佐天家

急に父親が海外から帰ってきたことにより
頭の中は、軽くパニックを引き起こしているが
それでも、朝や学校というモノは、やってくる

サソリの娘の小夜は、名門「常盤台中学校」に自宅から通っている
これについては、一つ説明を加えたい

輪廻眼サソリにより解決した「テイルビースト尾獣事件」により安全面の確保として
学園都市に家族で住んで良いということになったのだ

「おー！！おはよう小夜！！」

台所に向かい家族への調理をしている涙子が二階から学生服姿で下りてきた小夜に朝の挨拶を交わす

「おはよー……お母さん」

「今日は、能力測定の日でしょ、早くいなくていいの？」

「あたし、例外的に……一番最後になるから大丈夫……前回、器材壊しちゃったし……」

前回の様子

「はい、佐天さんどうぞ」

「はい」

輪廻眼解放↓すげーチャクラ（身体エネルギー）が溢れだす
↓当然測定不能

バチバチッ!! ボンッ

(器材から黒い煙が出て爆発)

「「あっ!!!!」」

回想終了

「凄い……」

感心する佐天であるが褒められている小夜は、まだ眠気から脱却していない様子で瞼を眠そうに擦る

小夜は、一家の寛ぎ(くつろぎ)スペースであるリビングに移動した

木製の少し大きめのテーブルが真ん中に横たわっており、その上に一つポツンとコーヒーの入ったマグカップが置いてある

母親が自分のために置いた物だろうか?

と思い、特に疑問も持たずにマグカップをグイッと一口飲む

ゴクゴッ……

二口目にさしかかろうとした時、身体の背骨から脳天にかけて鋭い刺激が突き抜けた

「ぎゃあああああ!!!!」

コーヒーなら液状の刺激が来るとふんでいたが

このコーヒーは、まるで片栗粉でも混ぜたかのようにドロドロとしており

ゆっくりとした刺激を舌と喉元に与え続けている

「あまつ！！！甘！！！！ぐぎゃあああ」

無意識に喉を掻き爪る

それでも、なお片栗粉コーヒーの刺激は、消えず生き地獄を味わう
(↑正に、今の状態)

小夜は、慌て口を押さえながら台所へと向かいだす
(洗い流したい！！！！これを！！！)

台所に飛び込み、母親がいることも構わずに蛇口をひねり水を放出させる

もはや、コップに水を注ぐ行為モーションすら待てないため

両手でお碗を作るようにして水を溜め、口の中と喉を洗浄にかかる

「ど、どうした？小夜」

口を洗浄し、憔悴しきった表情を浮かべる小夜に佐天(母親)

「うッ……………」

まだ甘ったるい

何…………？あのコーヒー

激物と呼ぶに相応しいほどの殺人的な甘さ

何故、あれが我が家のリビングに……？

その答えは、直後に訪れた

「おい……テーブルに置いたオレのコーヒー、誰か飲んだか？
少し量が減ってるぞ……」

本を片手に現れたのは、先日の父親発言の問題が冷めやらぬ「サソ
リ」であった

犯人は、お前か……

命を脅かされた感じなので無意識にサソリを睨み付けてしまう小夜

「……………??」

「あ！！もしかして小夜、サソリのコーヒー飲んじゃった！……？
そりゃ！！ああなるわね！！

あっはははは——！！」

二人の様子に察した佐天が小夜の一連の行動を言い当て腹を抱えて
大爆笑

「……何だお前が飲んだのか……」

「あたし、もう学校に行く」

「はっはははは——くくっ……朝ご飯は、ははっ……食べない
の……」

必死に笑いをこらえながら小夜に佐天が言う

「いない……」

既に、お腹が一杯になったわ……

眼も覚めたし……

小夜は、さっさと鞆を持ち玄関から無言で出て行った

「そんなにキツいか……？」

「凄いもんよ、脳が溶けるんじゃないかって思うもの………ぷっふふふふ……！」

夫婦の会話であった

学園都市の路地裏

「てめーも能力者だな………ぶっ殺してやる………能力者は、見てるとイライラするんだよ………！」

「……………」

不良とおぼしき5人組が一人の学生服姿の中学生の男を取り囲んでいた

学生服姿の少年は構わず歩きだし、その場から立ち去ろうとする

「おい………待て………これが見えねえのか………？」

少年の前に鋭利なナイフを出す不良の一人

「とりあえず………この奥まで来てもら」さっさと刺せばいいだろ………」

「んっ………」

「そんな武器持ってんならさっさと使えよ!! 早く俺を殺さないとお前らヤバイことになるからよ」

不意の一言に思わず固まる不良達であったが

少年は、ナイフを握っている不良の手首を掴み鋭利な刃を左側の鎖骨の下の所に沈める

ズブゥ…………

「こっ!!! コイツ狂ってやがる……自分からナイフを刺しやがった!!!」

呆氣に取られる不良達は、誰しもがその場から立ち去ろうと走りだす

「あ!! 残念だけど、俺の能力がもう発動するから!! 逃げ切れるもんなら逃げ切ってみな!!!」

と言い終わると同時にナイフで刺された箇所から大量の血液が零れ始め、しだいに液状の物体から形を変えていった

その血液の形は、徐々に人間の手のようになり真っ直ぐ不良達の方へと伸びていく

そして枝分かれをし、5人全員をいとも容易く捕まえてしまった

捕まえたことを確認すると少年は、ゆっくりとした足取りで不良達に近づいていく

「さて、また下僕でも増やすか」

先ほど刺されたナイフを片手に少年は、次々と不良達の皮膚を軽く切り出血させる

不良達は、恐怖で震えながら少年の所業を見守る他ない

少年は、不良達の出血部分から溢れ出てくる血液を手に取り、舐めた

「チッ！！全員「Rh＋」か…まず」

少年は、全員の血液を舐め終わると不良達が一望できる場所へと移動し

「これで、お前達の血液型、DNA型がわかった

俺の能力は、先ほど見せた通り「ブラッド（血）」だ

自由に血液を操ることが出来るんだよ

それは、他人も例外ではなく、相手の血液型とDNAが解れば簡単に操ることが出来る」

ナイフで自分の掌^{てのひら}を傷つけ出血させる

血液は、不良達の前で髑髏のような形となり時折、ゲラゲラと笑う素振りをしていた

「例えば、俺がお前達の血液に「凝固」という命令を出せば……全身梗塞で死だぜ！！」

学園都市、5人しかいない超能力者（レベル5）の第二位「漆黒のブラッド血」

血液を自在に操る能力者

自分の血液に裏切られたくないだろ……

4、激物な朝（後書き）

オマケ とある器物の新居設立 マイホーム

整理整頓終了

タレコミ

佐天「うんうん、そこに行けばあるのね……わかった」

ピッ

御坂「誰から？」

佐天「初春です、消防署の前にソファーとベッドが落ちてるらしいですよ」

初春……

サソリ「じゃあ、そこだな」

現場到着

佐天「ありますね〜♪」

御坂「本当にあったわ…」

江戸川乱歩（推理小説作家）に出てきそうね」

運ぶ

収獲

センスの悪いソファ―

さらに物色

佐天「御坂さん御坂さん!! 見て下さい」

御坂「何? どうしたの」

佐天「ストーブ!!」

収獲

ストーブ

佐天「ガス台もありますよ!!」

御坂「ついにキッチン用品が出てきたわね」

御坂がガス台を運ぼうとした時

佐天「ストップ御坂さん!! 2台ありますから、どっちがいいか選
びましょ!!」

佐天が引っ張りだす

が……

ガシャンガシャン!!!

ガス台が音を立てて崩れた

御坂「はい!! もうそっちはダメ!!」

収獲

ガス台

佐天「ちよつと待って下さい!!これ……ただの箱かと思ったら……
…冷蔵庫ですよ!!」

佐天と御坂が緑色の冷蔵庫を引っ張りだす

中を開けてみた
パカッ

佐天「臭ッ!!」

御坂「なんか目にくるわ」
と目をパチパチさせる

封印（閉める）

収獲

くさい冷蔵庫

続く

5、暗躍の二人と学園都市（前書き）

昔やったゲームシリーズ

「ポケットモンスター金（GB）」

最初に選んだのは「ヒノアラシ」

バグるまでやり込んだ結果ラプラスが炎のパンチを覚えました

5、暗躍の二人と学園都市

常盤台中学校

絶対能力者（レベル6）の佐天小夜の能力測定がとんでもない緊張感の中で行われていた

「ダメダメ！！！！もっと弱めて！！機械が壊れちゃいます！」

「えっ！！こ、このぐらい？」

輪廻眼のある両目を微妙に細めて小夜が能力を^{バイロキネシス}発している

あまりに高過ぎる能力値であるため最新のコンピューター三台を導入しての測定であるが早くも黒い煙がモクモクと出始め、かなり焦る観測者

「ストップ！！もう止めてください！！これ以上は！！」

（私の給料が消えます…）

「は、はい！！！」

測定機械が悲鳴を上げると同時に観測者も悲鳴を上げ慌て輪廻眼を引っ込める

「ふうー……相変わらず凄い能力ですね……」

「まだ、扱いが難しいですけど……」

観測者の女性は、器具の片付けをしながら（小夜で能力測定は最後

です)

「聞きましたよ!! 風紀委員^{ジャッジメント}の仕事頑張っているみたいですね!!」
「は、はい!! ありがとうございます…… (最近起きた銀行強盗は、
違う人が解決したが……)」と答え思わず顔を伏せる

「もう一人の絶対能力者 (レベル6) も治安維持の活動に参加して
欲しい所ですけど……」と観察者の女性が言う

そういえば…絶対能力者 (レベル6) の人が歴史上三人しかいない
って聞いたことがあるわね

「その絶対能力者 (レベル6) ってどんな人何ですか？」

「うーん……確か…子供みたいな性格ですかねー!!
興味のある分野しか能力を使わないらしいですけど…」

子供っぽい性格…?

朝の片栗粉コーヒーの実行犯が頭を掠める

まだ口の中が気持ち悪い

「そうなんですか…」

そんな学園都市の朝

学園都市のとあるホテル

茶髪でオッドアイの高校生がホテルの廊下に真っ直ぐ引かれている
赤い絨毯の上を歩いていた

廊下には有名な絵画や高価そうな壺などの骨董品がかなり豪華
そうなホテルであった

そして「488」と表示された豪華な扉の前で止まり

コンコン

二回ノックをした

すると一室から少年とも青年ともとれる男性の声が聞こえてきた

「どうぞ…」

扉の横に備えてある機械にカードキーを差し込むと赤色のランプか
ら青色のランプにピッと切り替わった

ガチャッ!!

高校生の男性が扉を開けホテルの一室に入ると

まず聞こえてきたのは、銃撃戦などの戦闘シーンの音楽

(またか…)

青年は、苦悩の表情を浮かべた

入口でずっと止まっているわけにはいかなかったので前に進む

ホテルの部屋も豪華な感じで装飾されておりオレンジ色を基調とし
ていた

部屋の中心に普通のホテルより大きめのベッドが鎮座しておりその上に狐の文様が描かれたパジャマを着ている少年がいた

パジャマは前側がボタン式で開くつくりである

少年は、ベッドの上で片膝を立て猫背の状態で携帯ゲームをしていた

音源は、ここか……

「お久しぶりです……元素使い（エレメントマスター）……ゲッ！
！「ヴァジュラ」が来た」

どうやらゲームが予想外の事態が起きたらしい

「また新しいゲームか……一回くらいは、全クリアしろよ……全く飽きっぽい人だ」

「レベル上げのシステムが嫌い……（子供か!!）」
とパジャマを着た少年が言う

「この状況を世にはびこるスキルアウトのれん「あっ!!!!」」

元素使いの青年が話してる最中にパジャマの少年が大きめの声を上げる

「……………」

ドロドロとゲームオーバーの音楽

死んだらしい……

パジャマの少年は、黒い携帯ゲーム機の電源を付けたままベッドの枕元に投げる

「飽きました……次はどのゲームにしましょう……」

とおもむろに立ち上がりゲーム雑誌を広げる

「またか……にわかに信じられないなあ……どのジャンルのゲームも一回もクリアしたことがない（たまごっちも含む）この人が学園都市最強の絶対能力者（レベル6）とは……」

「んっ……私の能力にケチをつけるつもりですか……」

ゲーム雑誌に目を通してながら

「ケチをつけるよりも……何で！？……という疑問が生じるな……お前の能力なら簡単にゲームはクリアできるはずだろ……学園都市最高のコンピュータ「ツリーダイアグラム樹形図の設計者」の演算能力を遥かに超える演算能力を持っているのに……」

狐の文様のパジャマを着た少年の能力は「アップソリユートシミュレート超高度並列演算」

佐天小夜と同じ学園都市の絶対能力者（レベル6）である

「お前が俺を呼び出したのは……もしかして前々から計画していたことを実行に移すのか？」

「いや……まだ着手しないほうがよいでしょ……まだまだ戦力が足りませんから……この前、めばしい能力を持つ能力者についてバンクで調べました……」

その言葉を聞くとオッドアイの青年が少し目をパチクリさせる

(珍しく自ら動いたな……コイツ)

「2、3人見て飽きましたけどね……」

コテンツ

がつくりとうなだれるオッドアイの青年

やっぱり

「それで……貴方に少し協力を仰ぎたいと思います……誰か心当たりの能力者は、いますか？」

パジャマを着た少年が中指と薬指を同時に口元に当てつつ聞く

「うーん……いきなりそんな話を振られましても……んっ!! どうか、アイツなら」

「誰かいますか？」

「俺よりも下の能力者になるが……一人いる……学園都市レベル5第二位の能力者「漆黒の血」^{ブラッド}かな……アイツの能力は、色々使える」

「そうですか……さすが学園都市レベル5第一位「元素使い(エレメントマスター)」直ぐにわかりやすい答えをありがとうございます」

オッドアイの青年の能力は「^{エレメント}元素」

化学でお馴染みの元素を自由自在に使いこなす能力

学園都市レベル5第一位の能力者

「それでは…貴方は、その御方を呼んできて下さい…場所は、ここにしましょう…私は少し調べたいことがあるので…お願いします」

オッドアイの青年は、少し頷き部屋の出口に移動するため向きを変えると

「あっ!!言い忘れていました…「佐天サソリ」という人物がこの学園都市にいるかどうかについても調べていたきたい」

「サソリ…?」

一時の疑問により行動が止まる青年

「その人が学園都市に帰っているか否かで私の計画の成功率が変わってきます…街中でその人物を見かけたとしても…勝負は仕掛けないで下さい…貴方は、絶対に勝つのは不可能ですから…」

冷静な口調で諭すように言う

佐天サソリ…まだまだデータが足りない人

彼の能力と私の能力…どちらが強いのでしょうか

いたずらに笑みを浮かべるパジャマ姿の少年

5、暗躍の二人と学園都市（後書き）

オマケ とある器物の新居設立 マイホーム

次の現場に移動の二人（御坂と佐天）

佐天「結構集まりましたね」

御坂「まさかの状況ね」

佐天「まさか一時間でこんな……ちょっと待って!! ベッドありますよ!!」

御坂「えっ!! 話す時間がないわね……」

物色

佐天「これ一式でいいですね」

ベッドのマットと骨組みを抱え

御坂「そうね……あと何かないかしら」

佐天「掃除道具でも持っていきます?……これは……」

御坂・佐天「ダニスプレー」ダニ駆除の最終兵器である

御坂がとある箱に目を付ける（マーガリンの容器みたいな）

佐天「それ何ですか?」

御坂「ダブルシャインって書いてあるわよ（靴磨きです）」

佐天「靴磨きですか…」

アンチスキル
警備員

御坂「やっぱりテレビは、もっといいのが!!」

響きわたるサイレンの音

佐天「やばっ!!アンチスキル警備員が来ましたよ!!」

御坂「ちよっ!!サソリ!!これヤバイことやってない!?!」

佐天「取り敢えずライト消して!!」

御坂が様子を見に行く

どうやらサソリ達の軽トラックの後ろでスピード違反の車を検挙しているようだ

佐天「あんな所で!!」

御坂「ちよっ!!便乗して捕まらないわよね!!?」

「ところで君ら何やってるの?」ってな感じで

取り敢えず収獲

ベッド ダニスプレー

ダブルシャイン

警備員がいなくなったことを確認して出発

一度集めた粗大ゴミを新居予定地に運ぶことにした

続く

6、再会（前書き）

遅くなりました！！

次回！！前作でも大活躍のだったあのキャラが登場します！！

ファンの方必見！！

6、再会

私立常盤台中学

小夜と琴葉が通っている学校であり、学園都市の中でもエリートの部類に入る

「さっすが！！小夜ちゃん！文句なしの絶対能力者（レベル6）！！尊敬しちゃうわ」

「はあー…ありがとう…琴葉の超能力者（レベル5）も十分に尊敬の対象になると思うわよ……はあー」

中学校のある教室で小夜と琴葉が話をしているが机に突っ伏している小夜の姿を見て琴葉は、思わず首を傾げる

「どうしたの小夜ちゃん？なんか元気がないみたいだけど」と琴葉が聞く

「いや、実は…何年かぶりに父さんに会ったんだけど…」

「えー！！小夜ちゃんのお父さんが！？……あっ！！それで悩んでいるんだね！！どんな対応をしたらいいか？とか」

八割がた正解であるが元気がないのは「片栗粉コーヒー（砂糖を大量に入れて、もはや液体じゃなくなったコーヒー）」の仕業であり酷い胸焼けが小夜の体に重くのしかかる

「ぎもぢわるかったよ……」

苦しそうに、机に突っ伏していた顔を横に向け苦悶の表情を浮かべる

（片栗粉コーヒーを一度でも飲んでみるとわかる）

しかし琴葉は、今の会話でまさかコーヒーが彼女を苦しめているとは思わないので……

「えっ！！そんなにお父さんって気持ち悪いの（想像の中で太った男性がポスターを片手に、鼻息を荒げている人が思い浮かんだ）！！」

と大きな勘違い

ここで片栗粉コーヒーのレシピ

1、まずフツのコーヒーをマグカップに注ぎます

2、次に砂糖をこれでもか！！と思う程投入してください
（スティックの場合、5gの物を×15を、スプーンの場合、大匙^{おおさじ}で山盛り5杯）

3、よくかき混ぜて下さい（底の飽和状態の砂糖が沈殿しているのです）

4、砂糖が均等になった所で一気に飲みます（時間が経つと再び沈殿します）

自宅でレッツ トライ！！

（よい子は真似をしないでね）

ふと考えると……小夜が飲んだコーヒーは、まだかき回していない状態（または、かき回してから時間が経って状態）であったから

サソリ的には、そんなに甘くないコーヒーだったかも……

恐るべし!!

そんな午後の授業に移る前の昼休み

一方、片栗粉コーヒーの発案者は……

「はい!!」

佐天（涙子）がニコニコしながら買い物鞆をサソリに差し出している
「これは何だ？」

「あら、買い物よ!! いつもあたしが行ってるからたまにはいいかなあと思ってね!! お願いできる?」

無表情のまま読んでいた本をテーブルに置き、立ち上がり

「別にいいが……ついでに研究所に寄ってくるから少し遅くなるぞ」

と言って、エコバッグを佐天から受け取った

「買い物する物は、メモに書いてあるから」

「メモ?」

サソリが袋の口を広げ中を確認すると、丁度小さ目の正方形のようなメモ用紙がポツンと入っていた

サソリは、そのメモを取り出して

「これのことか？」と言い内容に目を通す

メモ内容

ミッション!!

救援物資の不足に生じ、我が部隊（↑？）の健康状態を維持するのが困難になった！！加えて「一等兵 サソリ」に勅命を下す
以下の物資を早期に回収せよ

砂糖 ピーマン 牛肉

玉ねぎ 人参 ジャガイモカレールー（二段熟）

蛍光灯（20形）

インスタントコーヒー

~~~~~

「……………一等兵？」と訝しげに佐天に言う

「あら、二等兵の方が良かった？」

いや、そういう問題では…………取り敢えず買い物に行けってことだな

\*\*\*\*\*

某ショッピングセンター（学園都市内）

平日の昼過ぎということもあり、大体の買い物客が専業主婦を<sup>なりわい</sup>生業として  
いる女性が冷凍食品等の品物と値段を交互に見て回り、本日の献立を決めている

そんな女性客とは、対極的な存在の数少ない「男性客」であるサソ

リがメモを見ながら買い物を進めていく

平日のこの時間は、ほとんど男性客は来ず

来るとしても職を失った哀れな民人（俗にいう失業者）が暇潰しの目的で何時間も居座っているのが大概である

しかし、買い物に来ている男性客のサソリは、本当の年齢（ここでは、あえて触れない）と比べても年若い青年と見間違う程であり他の女性客にとって見れば学区内の大学生（本日休みの）に見えて  
いる

（次は、砂糖か……確かこの先を曲がった通路にあったな……）

買い物カゴに指令通りの品物を入れ、カートを押していく一等兵（子持ち）

調味料と書かれた看板のある通路に入っていくと、台所で料理の味付けに使われる醤油等のボトルが所狭しと並んでいた

お目当ての砂糖は、通路に入って丁度真ん中辺りに陳列されており、様々なメーカーの砂糖が必死にアピールするかの様に積まれている

砂糖といっても種類がありどれを買うか悩み所であるが

「……標準に上白糖にするか……」

とカートを隣に止め棚の下から二番目に置かれている上白糖に手を伸ばすと

「！！！！！」

サソリの伸ばしている手の逆サイドからもう一人の手が伸びてきて、

上白糖の前で鉢合わせのような格好になってしまったのだ

しかも相手は、女性らしい

サソリは、女性に先に取れと言わんばかり手を引っ込めるが……

「サソリ……？」

すぐさま、聞き覚えのある声で女性が手を伸ばしたまま聞いてきた

サソリは、その時初めて女性の顔を見ると

「……！お前、御坂か……？」

その場にいたのは、かつて「尾獣事件」テイルビーストの時に一緒に戦った

超能力者（レベル5）の超電磁砲レールガンであった

\*\*\*\*\*

「全く！！アンタも帰ってきたなら連絡ぐらいしなさいよね！！」

買い物を終えた二人は、近くの喫茶店に立ち寄り、久しぶりの再会に因み会話をしていた

「……………」

サソリは無表情のままグラス（中身メロンソーダ）を取り、それにチョコビツと口をつけた

まさか……こんな所で会うとは……

「一応、アンタの娘と家うちの娘が仲良くしているから、親同士でも交流を深めるべきよ！！」

御坂が熱弁を繰り広げる中、サソリは退屈そうにその様子に目を向ける

（そういえば……初春と白井は、今どうしているのか？）

御坂美琴…佐天小夜の親友である御坂琴葉の母親である。

長い間、幾度となく助けてくれた「上条当麻」に片想いを抱き続け、彼が大学に入ったと同時にアプローチを開始し見事ゴールインしたのだ

「って聞いているの！！？ アンタ」

怒られた…

身を乗り出して怒る御坂にゆっくりとした動作で顔を上に向けるサソリ

「まあ…ようするに元気でいることがわかって良かったじゃねーか……」

！！！！

サソリからの鋭い指摘に口をつぐむ御坂  
諦めたかのように喫茶店の座席に座り直していく

「アンタと話をする、怒るのも馬鹿馬鹿しいわね…」

「そういえば、初春と白井はどうしてるんだ…？」

御坂の大きめの溜め息を吐いたのを確認したかのようにサソリが話を始める

「ああ、そういえば知らなかったわね……確か、初春さんは、持ち

前のパソコン技術を生かした職場に就職して……黒子は、アンチスキル警備員の関係の仕事に就きながら「能力者と無能力者との違い」について研究しているみたいよ……まあ、時々「お姉さま〜!!」というメールが来るけど……」

あいつらも達者でやっているようだ……良かった……

サソリは、喫茶店の窓側の方に視線を変え、ビルの隙間から見える青い空を見やる

\*\*\*\*\*

某ホテル（学園都市内）

豪華な部屋の中で狐の模様のパジャマを着た少年が大きめのベッドに寝転がりながら小型のノートパソコンとにらめっこをしている

「レールガン御坂美琴……研究所に自らのDNAマップを提供し「シスターズ妹達計画」  
に  
関  
与  
……やはりこれだけですか……」

パジャマを着た少年は、ノートパソコンを折り畳み、仰向けに寝返りを打つ

「計画に移る前に……御坂さんと話をしなければいけませんね……」

パジャマの少年は、側に置いてあった携帯ゲーム機を手に取り、カチャカチャとゲームを始めた

本日の戦績ゲームの

総プレイ時間 5分

某人気モンスター捕獲ゲーム

博士からモンスターを貰った後のライバルが倒せず途中棄権

「なんで……相手のモンスターは、水鉄砲を覚えているのでしょうか?……」

首を傾げて悩む少年

なんとも不思議な少年であった。

## 6、再会（後書き）

オマケ とある器物の新居設立 マイホーム

午前3時15分

新居設立予定地

空き地のような所で前に拾った「江戸川乱歩ソファ」（もの凄く趣味の悪い）」に御坂と佐天が腰掛け今日の収穫について話す

「集まりましたね！！御坂さん」

「集まっちゃったわね…」

二人で集まった瓦礫（お宝）に目を移すと  
ベッドの一部、冷蔵庫、ガス台、謎のコロコロ等が無造作に置かれていた

「ただいまの時刻は、3時15分です！！！！まだまだ時間はありません」

佐天が元気良さそうに腕時計を見て申告した

「あと四時間……本当にきついわ…」

背景が全部ブラックアウトの中、サソリのライト用の傀儡が二人を照らしている

「御坂さん！！今まで学園都市の中心に沿って集めてきましたが！！なんと西部も本日「粗大ゴミ」の日らしいですよ！！！！」

何処からその情報を……



「取り敢えず、使えそうな物を軽トラックから下ろしましたが！！  
まだトラックにはテレビ（ベータ）や椅子等が乗せたままです」

軽トラを指さしてブンブンと手を振る佐天

そこで佐天の野望が爆発した

「あたしは、絶対！！テレビは「ワイド」が欲しいです！！」

デカデカと両手で正方形を描き軽く興奮している佐天  
隣でもの凄い温度差を感じる御坂

さらに野望は続き

「あとは、ですね！！生活に潤いを持たせてくれる美術品などが欲しいですね：「モナリザ」とか捨ててないでしょうかね（↑あり得ません）」

ゆとりある生活

ワンランク上の生活

「そうだよねー！！私達が今座っているソファーもいつ崩れるか分からないわ」

軽く重心を前にずらしている御坂

ことのほか、良いものが集まってテンションが高い佐天とまんざらでもない御坂

「せっかくですから！！立派なマイホームを建てましょう！！！！」  
佐天の目が激しく燃えていた

\*\*\*\*\*

午前3時39分

学園都市西部

軽トラックを軽快に動かしながら粗大ゴミを探す二人

しかし、搜索に来てみたものの目立った粗大ゴミは見つからない

もう信号を無視して進む（ダメです）

「ないですね〜…」

「なんか道、狭くなったけど大丈夫？」

と話してる時に二人の隣に公衆電話が……

「あっ！！もしかしてこれも粗大ご……「違うわよ！！」

はつきりと言われた

しばらく暗い夜道を走行している時、佐天の目があるものを捉える

「あっ！！掃除機！！しかもホース付いてます……これ落ちてますよね？」

不自然に粗大ゴミの所ではなくポツンと歩道に掃除機があり、御坂に確認を取る佐天

「これは、落ちてるわね……まさか此処を掃除するために置いている人もいないでしょ……でも、ヤラセのように置いてあるわね」

取り敢えず、手早く回収

ちゃんとコード（コンセントの）が動くかどうか確認して

収獲

掃除機（ホース有り）

さらに搜索を進める二人

段々と狭い道にさしかかりサソリの運転も徐行を余儀なくされた

そんな狭い道の十字路に入った時

目の前に明らかな酔っぱらいのオヤジが自転車に乗って姿を現した

自転車に乗っていてもヨロヨロと危なっかしいハンドルさばきで運転している

佐天達に乗っている軽トラックは、先にオヤジに道を譲る形で止まってオヤジを見ていると

「「あっ！！！！！！えー！！激突した！！」」

まさかの出来事に啞然とする二人

オヤジに起こった悲劇

ヨロヨロとしたハンドルさばきで佐天達の軽トラックの左に切る

まさかの電柱に正面衝突し転倒

恥ずかしそうに自転車を立て直すオヤジ

「お前ら助けてやれよ」

サソリからのもっともな指摘

「今ので目が覚めたわ……」

オヤジ大激突

「何がしたかったのでしょうか……俺はこっちだ!!（オヤジのまね）」ってハンドルを切って「激突!!」

佐天が自転車に乗ってるまねをしながら話していると

御坂がついにワンランク上の生活用品を見つけた

「あっ!!もしかして卓球台?なんか凄いものを見つけたわ!!」

そこには、足がガタついているが緑色のコートが眩しい「卓球台」であった

軽トラックを止め、慌て回収に向かう佐天と御坂

「いよいよ!!我が家に娯楽が来ました」

他にいいのがないか物色

佐天が緑色のカゴのようなものを退かすと

「あっ!!御坂さん!!茶碗がありますよ!!ご飯食べれますよ!!」

収穫

卓球台      茶碗

「佐天さん、スリッパあったけど」

御坂がモフモフのスリッパ（片足だけ）を片手に佐天に駆け寄る

「もう一足ありますか?!?!」

佐天の言葉でもう一度探す御坂

そして、緑色のビニールの中にもう片方のスリッパが見つかった

「あったあった!!!!」

収穫

ラジコン      スリッパ

豪華な食器棚

続く

7、とある休日……（前書き）

本日の心霊映像特番……半端ない

今日寝れるか不安です

## 7、とある休日……

土曜日（休日）の午前10頃

佐天家の二階の一室にベッドに倒れこみ、かなり落ち込む絶対能力者（レベル6）「佐天小夜」

「かなりマズいことになったわ……」

青い水玉模様の枕に頭を埋め両足をバタバタさせて唸る

本日の朝起きて家族全員で食事を食べ終わった後、小夜は自分の部屋に帰りこれから来るであろう恐ろしい所業に頭を悩ませているのであった

その様子に自然と気に掛かるのが、小夜の両親である涙子とサソリである

リビング内において難しそうな本を読んでいるサソリとその向かい側に座っている佐天から心配の声が上がる

「小夜……どうしたのかしら？ずっと部屋に閉じこもったりして………ハッ！！もしや、これが親とのすれ違いから始まる「引きこもり」と呼ばれる現象なのかしら！！そうなたらどうやって食事を届けたらいいの？」

メモにはなんて書けば良いの？」

佐天があれこれ不安要素（確証なし）を並べていく中、サソリは佐天が入れてくれた紅茶に一口つけると視線を本から外さずに

「……なんかあったのか？」

と目の前で四苦八苦している佐天に質問した

「うーん……昨日のカレーに人参を入れたのがばれたかしら……」

名探偵のように佐天が推理をするが会話の内容が小学校低学年を相手にしているようである

子供かよ……（小夜はまだ子供だ）

なんだかんだで昨日の夜からおかしかったな……いや、小夜の友達との会話からおかしくなったと言えば的確か？

サソリは、本をポンツと閉じて佐天だけに聞こえる程度の声でボソツと言った

「……関係があるがわからんが……昨日のことだが……」

昨日の夕方

サソリは、御坂との会話によって自分の研究所に行く時間がなくなり、諦めて家に帰るべく歩みを進めていた

「予定が狂ったが……まあいいか……」

太陽が傾き出し空が霞掛かる中をエコバックを持つ一児の父 サソリ

この時間帯に來ると学校からの下校なのか、それなりの数の学生がぞろぞろと一塊で移動していった

アイツらも家に帰れば、親がいる。出迎えてくれる家族がいる……



サソリのすぐ脇をすり抜け「今日おきた出来事」について共に語り、明日が来ることに疑問を持たない学生

サソリは、そんな様子に小さな笑みを浮かべて見続けている

サソリの生まれた時代は、最悪であった…

戦争中に親を亡くし、戦争の兵器になりかねない傀儡を里の先頭に立って研究を重ねてきた

忘れていけないのは、サソリが過ごしたその期間は今日の前で談笑している学生とそんなに歳が変わらないことである

まだ学生であるべきサソリが里を抜け出し、テロ組織のメンバーに加わり、想像を絶する位の血の中で彼は成長してきたのだ

もし、ババアや親が今のオレを見てどう思うだろうか？

その前にババアに土下座か…

自嘲するかのように顔を俯かせてクスリッと笑った

サソリは、子供が生まれてから約束したことがあった

一つは「どんなことがあっても必ず守る」

二つ目は「一人にしない」

前者の方は親として父親として当然のことであり後者は、自分が育ってきた環境に子供を置きたくないという思いから…それと「自分が死なない」こと意味している

と思っていたのだが…小夜が小学校に上がるか否かでヨーロッパ

に仕事で行かなくてはならなくなり  
いきなりの約束破りに正直後ろめたい……

なかなか上手くいかない物だな……

学園都市に敷き詰められたタイル張りの路を踏みしめていく小さな  
ため息をつく

ふと気になるのは、小夜が自分のことをどう思っているかというこ  
とである

（意外に繊細な一面……）

と思いながら歩いていると

遠くの通りに父親譲りの赤色の髪を持ち（決して傾いた日の光では  
ない）、友人らしき人達三人と元気良く会話をしている小夜を見つ  
けた。

一人は、小夜と同じ制服であるが後の二人は別であった

サソリは、目を凝らしてよく見ていると小夜以外の三人は、かな  
り会話が盛り上がっているが小夜本人は落ち込んでいるような、な  
んとも言えない表情を浮かべていたのだ

サソリはその事が引っ掛かり、建物の隙間に身を潜めとある術を使  
いだす

「影分身の術……」

ドロンッ！！という乾いた音と煙の中からサソリの影分身が出現した

これで小夜達の会話を盗み聞きするかな……

サソリは、自分自身で確認を取り立かったが佐天からの頼まれ事の「買い物」があり、早く帰らないと食品が傷んでしまうため、分身のサソリに後を任せることにしたのだ。

静かにアイコンタクトを分身と交わし、サソリはそのまま路地裏を後にした

その場に残った分身のサソリは、小夜達に気付かれない様、細心の注意で四人の近くに移動する

元々忍者であった為気配を隠すことは、サソリにとっては造作もないことで一旦四人とすれ違い、すぐあとをつけるといふ大胆な行動に移った。

……気配は、絶っているが念には念を入れて……

分身のサソリは、印を結び「変化の術」で会社員風の男性に姿を変え、耳をすます

「……というわけで明日の土曜日に心霊探検に行っちゃうぞー!!」

「あ…や、やっぱり止めた方がいいよ……そういうことは……」

「あー!!小夜ちゃん、ひよつとして怖いのか?」

絶対能力者（レベル6）に怖いモノなんてないわよね」

「べ、べべ別に怖がってなんか、あたしはみんなが怖いんじゃない

かと思ってね……」

「小夜さん……膝が笑ってるよ……リアクション芸人を目指すなら、もっと大きく身体を使うのだ……!」

「目指してなんかないわよ……!」

「じゃ……!小夜ちゃんも乗り気なので……う……ん……明日の深夜零時に常盤台中学正門前に集合ね……!」

「えっ……!そんな……」

\*\*\*\*\*

「……という会話があった……」

サソリは、閉じてソファに置いてあった本を手に取り<sup>しおり</sup>葉を外す

「んっ……!……?……どうした……?」

サソリが佐天に目をやると両手を高く上げ、いかにも「驚きました……!」のポーズ

顔をどこことなく青くして

「それは、マズいわね……」

「……?」

「あの子、凄まじいくらい幽霊とかが苦手なのよ……前にあたしが某有名なホラー映画を見てた時に、たまたま小夜の目に入っちゃっ

て大変だったわよ」

キャアアア！という叫び声と共に輪廻眼の能力を解放して家が半壊しかけたそうです……ヤバッ！！

「どうりで……食器棚やらテレビが新しくなってると思ったら……そういうことか」

サソリがキョロキョロと辺りを見回して呟く

「このまま小夜を行かせたら、死人はおろか心霊スポットが地図から消えさるわ……」

サソリと佐天の脳裏に原爆投下の映像が流れた

巻き上がるキノコ雲……

「だったら……そんな誘い断ればいいじゃねーか……？」

「ダメよ！！友達付き合いは大切だし、小夜はなかなか誘いを断れないのよ（母の鋭いカン）

恐怖乱戦モードの小夜を止める係が必要ね……」

佐天が頭に手を当て暫く考える

小夜能力を遥かに上回って……止められるくらい強い人……かつ身近な人

んっ！……！

佐天は、目の前にソファーに腰かけているサソリを見つめた

「あっ、いた！！小夜の恐怖乱戦モードを止められる人がここに！！！」

「あっ！！？」

サソリは、首を傾げる

そう、小夜と同じ輪廻眼を持ち実践経験がたくさんあるサソリに白羽の矢がたったのだ

しかし、ここで新たな問題が……

「つまり、オレが小夜達と行動を共にして暴走した小夜を止めればいいんだな……」

あからさまに嫌そうな表情を浮かべ、「面倒……」と言いそうである

「……それが一番いいんだけど……小夜の友達だから全員女の子になるでしょ！そこに唯一の男、自分の父親がついてくると楽しめないからね……うーん」

つまり「友達との集まりにサソリ（父親）が出てくるのは、おかしい」と言いたいらしい

「じゃあどうすんだ？」

小夜を止められる奴が他にいるのか……」

佐天は頭を軽く叩きながら考えを引っ張ってこようとする

「……小夜を止められる位強く、女の子で同年代の……あ、あー！  
！いたわ……」

ニヤニヤしながらに近づきポンッ！！とサソリの肩に手を置く佐天  
ゾクッ！！サソリの頭から背中にかけて悪寒がつんざくような感覚  
が…

\*\*\*\*\*

時刻は深夜零時

科学が発展した都市であるがこの時間帯に入ると月の光の届かない  
暗闇には自然と奇々怪々の念を抱いてしまう

「おっ！！小夜ちゃん到着！！！」

（来てしまった…）

待ち合わせ場所である常盤台中学の正門には既に小夜以外の三人が  
集まっていた

両手をブンブンと手を振り小夜を出迎える琴葉

「おっそいぞー！！小夜！！置いてちゃう所だったぞ」

むしろどうぞ……

今にも小夜の心臓は、飛び出しそうである  
膝の震えが止まらないよー！！！！

やはり友達同士の方が盛り上がる（↑？）

その四人に近づく一人の影が……

「ちっ！！ 久々に使ったからまだ身体がなれねーな……」

そこには、髪を天辺で結っており「暁」の装束に身を包んだ女性が  
ゆっくりとした歩行で四人に近づいて行く

その姿は、ペイン六道の一角である

「畜生道」であつた……



## 7、とある休日……（後書き）

オマケ とある器物の新居設立 マイホーム

だいたい家財道具も増えてきたので「生活に潤いをもたらす芸術品」  
を手に入れる（目標）

うつすらと朝日が差し込んでも作業は止めません！！

佐天がゴミ捨て場へと走りより

「あっ！！ちょうど座布団が欲しかった所ですから」

収獲

座布団三枚

次の現場へ

しかし無情にも雨が降り始めてしまい二人のテンションもガタ落ち  
である

さすがに雨の中やる程の企画でもないため（というか発案者のサソ  
リが飽き始めている）

「じゃあ……止めましょうか」

という話をサソリ達と交わし満場一致で決定

建設現場へ

「いえーい！！雨が降っても気にせず行きますよ！！」

佐天が空き地の所に不自然に置いてある木の板で作られた部屋の中で飛び跳ねる

今回は、家をまるごと作るのではなく部屋のレイアウト等をしていきたいと思います

いざ、夢のマイホームを作ろう

まずは、部屋全体にカーペットを敷き詰めます

御坂がカーペットを広げながら「フフッ」て静かに笑った

「やっぱ捨てられることだけあるわ……しかもピンク」

洗濯によって色素が薄くなったピンク

部屋全体にくたびれピンクのカーペットを引き終わり

次の作業へ

二人の話し合いで部屋の東側をキッチンとすることになり家具を運ぶ

ガス台とくさい冷蔵庫を置き（無理矢理キッチンと呼ぶ）

冷蔵庫の上に電子レンジを置いて

「思い起こせば……私達のこの企画もこれから始まったわね……」

「明るい所でこれ見かけても絶対拾いませんよ」

ここで発覚……！電子レンジの扉が開かず

続いてリビング制作

おしゃれな食器棚をキッチンの横に置きソファーとテレビを並べていく

「おー！！なかなか良い部屋になりました」

続いてベッド

それ程組み立てるのが難しいベッドでないため簡単にソファーの横に設置することができた

なんだかんだで部屋が完成！！

ソファーに二人で腰かけて部屋を見回す

「良い部屋ですね！！センスは全くないですけど……」  
ピンクのカーペット……

「じゃあ…ホームレスになったらここに住みましょうね御坂さん」

「丁重にお断りするわ！！」

今でも学園都市の空き地に不自然な建物は存在しています

とある器物の新居設立<sup>マイホーム</sup>

完

御坂「凄いグダグダだったわね……こんか馬鹿馬鹿しい企画まだやるの？」

佐天「なんか次回の企画のために「スペイン」に行きましたよサソ

リ」

御坂「えっ！！まさか…」

佐天「牛追い祭りのパンフレット持っていましたよ」

御坂「ヤバイ！！次回ヤバイ」

次回予告！！

猛きスペインの闘牛

VS

レールガン  
超電磁砲

になるかも？

私、絶対無理だわ……

お楽しみに

## 8、怪談と出逢い（前書き）

実家に帰ってきました……  
相変わらずの田舎です

近くにセブンイレブンが出来たと父親が自慢していました

## 8、怪談と出逢い

畜生道の参上まで)

佐天が理想とする小夜の監視及び破壊抑止の人

1、女性である。

性別が同じなら安心感が出てくる

2、同年代である。

さすがにオバサン世代では気を付かってしまう

3、小夜の多重能力デュアルスキルに対応できる。ここは、最重要項目!!

この三つを基本原理として人物を洗い出してみると簡単に一人がヒットした

(意外……むしろ強引な気がするが)

サソリが佐天の家のリビングで輪廻眼を開眼させ、軽く印を結んだ

そして叩きつけるように片手の掌を床と接触させる

するとサソリの手を中心に大量の文字列が円形状に現れ、白い煙が部屋中に広がる

口寄せの術だ。

サソリの手が覆い被さる所から木でできた縦の長い四角柱が出現した

棺桶であろうか……サソリ達のようにその中に入っている一人の少女が目を瞑っている

サソリは、輪廻眼の目を閉じ静かに呟く

「久しぶりだから……動くかわからん」

サソリが目を閉じてから30秒経った頃であろうか

ギイイイイイ

まるで硬くなった物を無理矢理動かそうとするような音が聴こえ出し、目の前の少女がピクリツと動作をする

初めは首を左右に傾け、ゆっくりと首を回す

手を上の方に上げ靱帯を伸ばし、関節の機能を回復させる

ある程度伸ばした所でようやく少女は口を開いた

「操作が難しい……まだ人形の方が操りやすいな……」

頭の天辺でオレンジ色の髪を結び、独特の服である「暁の装束」に、全身にピアスのように刺さっているチャクラ受信機

かつて尾獣事件の影の功労者「畜生道」がそこにいた

元々は、サソリの所属していた犯罪組織の表リーダー「ペイン」の六道の一つとして木の葉の里を襲撃した者であり、ペインの意志を要として動いていた

術系統は、「口寄せ」

テイルビースト事件が起きる前に輪廻眼と共にペインから譲り受けたその事件が終息した後にサソリが口寄せの術式を嵌めて長い間しま

っていた

定期的にチャクラを注入していたため朽ちることもなく生前の面影を遺している

「いやーやっぱり可愛いよ!!この声も身体も!!」

小夜の監視役には適任ね!!」

中身オレ（父親）だけど…

「問題は名前よねー……畜生道でいくわけにもいかないし……ちょっとさー、可愛い声で「私、リクちゃんっていいましゅ!!」って言ってみて!!」（ぶりっ子ポーズ）

「……………」

ガタンッ

畜生道の身体がその場に静かに倒れ込み、サソリが同時に目を覚ます

「知るか……勝手に滅べばいい……」

「ああ!!待つてゴメンごめん!!今のナシ（笑）!」

\*\*\*\*\*

視点 佐天小夜

あたし達の心霊ツアーに急に参戦した謎の少女

顔や耳の至るところに黒いピアスをしており髪もオレンジ色に染めているようだ

はつきり言って不良以外の何者でもない……正直帰りたいよー!!

こんな山道に夜中に来るもんじゃな…ガサガサ

ギャー!!……風か!!風の仕業ね!!そうだと言って!!



注）風は答えません

ただいま夜中の零時12分

小夜達は、地元でも「出る」という心霊スポットを訪れている

昼間に入ればそれほど恐い所ではないがこんな時間に入れば例外である

「よし！！この辺りでちよっくら怪談話でもしますか！！」

懐中電灯の灯りで適当に座れるスペースを探して五人全員そこに無理矢理座れる

勿論、畜生道のサソリも小夜のすぐ隣に座った

（そうよ……一番不気味なのはこの人よ……みんなが話している時もあたしの方ばかり見ているし……会った時から無言のままだし）  
ちなみに畜生道サソリは、「心霊研究の取材」という名目で同行しています

歩いててわかったが先日の雨で地面がぬかるんでおりいつも以上に足に負担がかかっていたので座れることには同意していた

「うわー！！私こういう所で怖い話するの初めて！！  
なんかドキドキするね」

琴葉が小夜の背中をポンポンと叩いてはしゃいでいる  
暗くてよく見えないが小夜は、恐怖のあまり顔面蒼白にしながら……  
：「う、うん」と力なく相槌を打つ

となりの不気味な女性への警戒を怠らずに……

一方の不気味な女性（畜生道サソリ）は、輪廻眼で周りの様子を確かめ、この場所は安全であること認識していた

特に不審な影がないから大丈夫か……

全員が静かになった所でホラー好きの少女がイチオシの怖い話を切り出す

「じゃあ……話を開始するけど……みんなは「かごめかごめ」っていう昔の遊びを知っているかな？――

かごめかごめ

子供の遊びの一つ

鬼は目を隠して中央に座りその周りを他の子が輪になって歌いながら回り歌が終わった後に鬼は自分の後ろにいる子は、誰であるかを当てる遊びである

しかしこの歌の歌詞に疑問を持った方は多くいると思います

その歌詞と言うのは……

と言うとその子は、静かにその場に立ち上がり

歌いあげる……

かごめかごめ

かごのなかのとりは

いついつでやーる

よあけのぼんに

つるとかめがすべった

うしろのしょうめんだーれー

聞けばきくほど不気味な歌詞である……今日は、この歌詞の謎を解明したいと思います

この歌詞には諸説ありますが……一番有名な説を今宵紹介します

### 子供の霊説

女郎さんが、流産してしまった時にその供養のために唄った歌だとか……

「かごめ」……籠女、妊娠をしている女性の古い呼び名

「かごのなかのとりは、いついつでやう」

……お腹にいる赤ちゃんがいつ出てくるのだろう

「夜明けの晩に」……夜明けなのに晩、つまり「この世ではない世界」

「鶴と亀が滑った」……おめでたいこと（その象徴が鶴と亀）が滑った

つまり「流産」したということ

「後ろの正面だあれ」

そこまで言うとその少女は一呼吸置いて、出来る限りの不気味な声で……

「う・し・ろ・に・こ・ど・も・が・い・る・よ」

と懐中電灯を下から当て見事な演出に息を呑む一同（畜生道サソリ

を除く)

「他にも諸説あるから調べてみると面白いよ!! 鶴さんと亀さんという名前の二人の話もあるから!!」

話が終わり安堵する小夜の友達二人

「いやー!! さすが迫力あるなあミノちゃんは……昔さんざん泣かされた記憶があるわー」

「怖かったけど笑い的には零点です!!」

すっかり凍り付いた空気が和んだが……畜生道サソリの注意は小夜だけに注がれていた

未だに一言も話さないが内心は恐怖で今にも輪廻眼の力を解放してしまうことがわかっていたからだ

勿論、そうならないのは、小夜が必死に抑えこんでいるからである

しかし……あと一滴……あと一滴……恐怖の雫が小夜に注がれたら……

「あっ!! 小夜ちゃん……後ろに男の子がいるよ!!」

注がれた……

「きゃああああー!!」

小夜は一直線に深遠な森の中へと走りだしていった

「うっそびよ……アレ? 小夜ちゃん」

「バカ……」

月灯りに照らされた少女は奇妙な装束のまま小夜が走りだした方向  
一歩前に出て

「ここで待ってろ……」

と言って消えていった

再び視点 佐天小夜

怖い……怖すぎる

かごめかごめ♪

ああんもー!! ずっと頭の中で歌詞がグルグル回ってる!!

パキッ!! 折れて地面に落ちてしまった枝を踏み乾いた音が響くが  
今の小夜の耳には入らない

つるとかめがすべった♪

……うしろにこどもがいるよ……

思わず振り返って男の子がいないか確認

ホッ……誰もいない(ちよつと落ち着く)

ん!! なんか今、看板があったような……

看板

この先崖!! 注意

キケン!!

小夜は道の途切れに気付かずそのまま身を飛び出してしまった

「へっ！？ちょっ！！きゃああああ！！！！」

輪廻眼を開眼させるが冷静さを失っている小夜には能力が発動せず  
に下の川に向かって自由落下

「な、なんで使えないの？  
ちょっと！！」

死んだ……そう思い目を必死になって瞑る  
迫る川へと恐怖か……それとも自分の死を見たくないという反射運  
動かわからないまま落下する

フワリ……「！！」

急に重力に逆らうような力を受けたのを感じて薄ら目を開ける

数秒経っても景色が変わらない……アレ？

重力とは違う力の所在を確かめるため上の方を見ると先ほどの顔に  
ピアスした女性が小夜の服を掴んで宙に浮いていた

しかし実際には、小夜の服を掴んだ手とは反対の手でチャクラ糸を  
出してロープ代わりに使っていたのである

「目を開けたか……」

「えっ！！きゃあ！！」

畜生道サソリが小夜を軽々片手で持ち上げて自分の正面へと抱き寄

せる

「／／／／／」

思わず顔が真っ赤になるのを感じた

「しっかりオレに捕まっている……」

そう言うとき畜生道サソリは垂直にそびえ立つ岩壁に両足を付け、おもむろにチャクラ糸を切断

畜生道サソリの身体は壁と垂直になった所でピタッと落下が止まる  
もはや声が出ず、畜生道サソリの腕の中で目を瞑り震えている小夜の頭に手をポンッ!!と置き

「大丈夫だ……オレが必ず守ってやるから……」

ドキン／／／／／

えっ!?! なんか胸が凄く苦しい……けど……このままですっというたい  
すっかり畜生道サソリの腕の中で安心感を覚えた小夜の意識を失ってしまった

その後の記憶は途絶えて

気が付いたら自分の部屋で横になっていた

日にちは、土曜日の翌日の日曜日……

布団を頭からかぶりボソッと呟く

「あの娘は誰なんだろう……?」



## 8、怪談と出逢い（後書き）

オマケ 企画発表

7月11日

なんかの空き地

旅行鞆（コロコロ付き）を地面に擦らせながら御坂が入り、続いて佐天も入る

今回からカメラマン（初春）が加わりました

「どうも、皆さんお久しぶり！！ひっそりと連載している「とあるオマケの企画」<sup>チャレンジ</sup>です」

そんな名前だったんだ……

「なんか「7月の上旬を空け」という謎の指令がメールで届いたわ」

さて、とりあえず本題に移る

「うーん……御坂さん！！あたしの今日の服装どう思いますか？」

佐天の着ている服には、スペインの国旗と猛々しい牡牛がプリントされている

「うう……前回のことを引きずるとまんまね！！」

あと……なんか後ろにボードが置いてあるけど……これ牛の角よね？」

御坂が後ろに用意されている黒いボードの尖った双角を掴む

「今回は、きつちりと企画発表をする……前回の反省を生かしてボードを手作り（初春作）しました……」

「まあ、企画は徐々にわかった方がスリルありますから!!」

「ちょっと!!このボード、角があるし佐天さんの着ている服……これでいいわけ？」

「まあ、きつちりとやるぜ……」

「私まだ信じないわよ!!観光地に行くつもりで準備したから!!」

カジュアルな格好の御坂

「随分小綺麗な格好で……大丈夫か?……あ!!早く企画発表しないとゲストが今回来てるから……」

そこで佐天にバトンを渡すサソリ

「えっと……今回ゲストが一名来てます……レールガンを知っている人なら誰でも知っている……「白井黒子」さんです!!!!」

ゲスト レベル4のテレポーター

白井黒子

「おねええさま!!!ようやく黒子!!!ここまでできました!!!サソリさんに「出して下さいな!!!」と足繁く通った甲斐がありますわ」

白井も旅行鞆を背負った……というよりは探検家のような姿で御坂達の前に現れた

企画発表……!!

佐天がボードの前にたち

「それでは……!! このボードを使って企画の発表をしたいと思います  
……!!」

ボードはテープのような物を剥がしていくと企画がわかるようになってます

まず……!! 企画タイトル

「えいや……!!」      ペリッ……!!

出現「とある激闘の……」

「ああ……!! げ、激闘……これは……!!」

2枚目

ペリッ      「御坂美琴」

ペリッ      「佐天涙子」

ペリッ      「白井黒子」

「参加……決定……!!?」

「あわわわ……」

（白井も企画の全容がわかってません）

「さあ、ドンドン行きますよ!!」

3枚目

「てーい!!」 ペリッ

出現「トップは私だッ!」

「トップは私だ!!!これはヤバイわ!!!トップということは」  
追いかけて」になるわね!!!うわ!!!」

競争……

牛に追いかけられるスペイン市民の姿が……

「さあ、次はここです」

「えっ!!そこ?」

4枚目、5枚目を飛ばして6枚目に手を置き、一気に剥がす

6枚目

ペリッ 「追い祭り」

「あああああ!!!遂にその単語が!!!」

追い祭り……

薙ぎ倒されるスペイン市民

「もう、あの祭りしか出てきませんわ……」

続いて飛ばした5枚目

「えい!!」      ペリッ  
出現 「し」

6枚目と合わせて読むと  
「○（空欄）し追い祭り」

「やっぱりいい!!! 頭の中で考えた通りよ!!!」

○し

屈強なスペイン市民が薙ぎ倒されていく

「もうわかっていると思うが…続けるぞ」

飛ばした4枚目

ペリッ 「む」

??

つなげて読むと

「むし追い祭り」

「……?? むし追い……?」

何が起こったの? ……どうしたの?」

「では、最後に二枚同時に!!! えーい!!!」

ペリッ 「イン 西表島」

ペリッ 「とある激闘の西表<sup>ムシキング</sup>」

「というわけで……今回は南の島でムシ取りをしたいと思う……」

サソリが今回の企画の趣旨を説明するが、あまりに予想外の出来事に憔悴する御坂と白井

「つまり昆虫採集です!!」

佐天がそそくさと着替えて昔のイタズラ小僧の格好になり、右手に網!! 左手に虫籠を装備

ちなみにボードの角は、牛ではなくクワガタの角らしいです

「……むし……前回もそうだけど……絶対グダグタになるわよ!!」

「わたくし、パスポートも持ってきてしまいましたわ!!」

御坂も同じく

「あのさ……ちょっと訊いていい?……取材はどうなったの? スペインまで行って……」

「いや、盛り上がりました……というかオレもう、見ちゃったし……」

「見ちゃったって……アンタね!! 企画決める取材でしょ?……もうこんな会話をするのもバカらしいんだけど……」

「なんかスマンな……パスポートまで用意したって……」

「そうよ!! この日のために「期限が切れてないか」確認したんだから!!」

「まあ、意見は飛行機の中で聴くとして……チケットあるからさつ  
さといくぞ……意外に時間かかるから……」

「「えっ!!」」

東京↓沖縄↓石垣島（一泊）↓西表島（明日到着）

という行程で西表島に行きます

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0551m/>

---

とある暁の輪廻( リンカネイション)

2011年1月4日04時10分発行